

東シベリアの植物

札幌市 高橋 英 樹

1992年の夏、東シベリアのサハ共和国で40日間の植物調査をおこなった。そこで心に残った植物や植生についてまとめてみた。

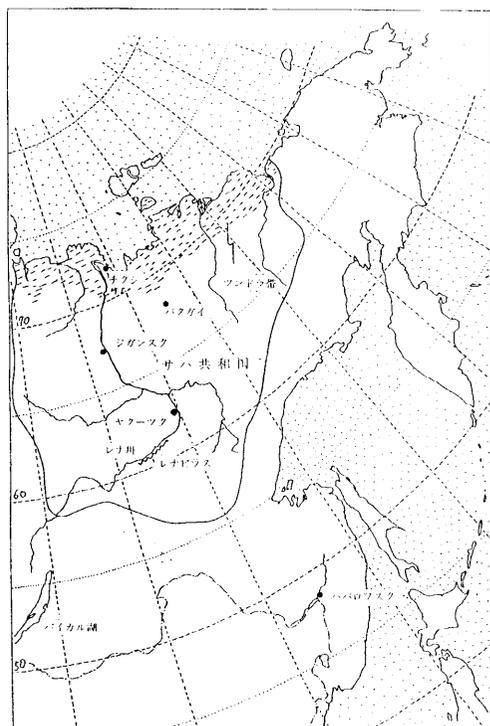
チクシのツンドラ植生

チクシはレナ川の河口近くに位置する小さな町であるが、ほとんどのシベリアの地図にその名がのっている。この町は北極海に面した軍事上の拠点で、港と空港がある。われわれは小さな飛行機に乗ってサハ共和国の首都ヤクーツクからベルホヤンスク山脈の東側バタガイを経てチクシまでやってきた。

ここはツンドラ帯である。かくして、ここでの滞在期間中の食事はトナカイ肉となった。夏の生育期間が短く温量指数からいっても森林が成立できない。私たちがいた7月の1週間の間、1日は20℃を越えたが少なくとも2日は昼でも10℃を越えなかった。まだ海には流氷があり船が氷にぶつかって航行不能になったという話も聞いた。われわれがツンドラ気候の厳しさを実感出来たのは、地中に掘られたトンネルの中だった。このあたりでは真夏でも地面をちょっと掘ってみればその下は凍っている、氷久凍土である。そこで地面のなかをくりぬいたトンネルは0℃以下となり天然の冷蔵庫というべきか冷凍庫というべきか、とにかく肉や魚の貯蔵庫になっている

のである。

地上の植物はどうかというと、種類数が予想していたよりはるかに多い。ヤブカの来襲のもと方形枠をとって種類数を調べた。2×2メートルに30種類近くある。大雪山の高山植生での値の2倍近い、という。地球上では暖かい地方に種類数が豊富で寒い所に行くに従い種類数は減るとというのが常識と思うが、これはチクシでは通用しない。イヌナズナ属 (*Draba*) が特に種類豊富で、ほかにはシオガマグク属 (*Pedicularis*) やユキノシタ属 (*Saxifraga*) が多い。北海道との共通種もあり、チシマアマナ・キバ





チクシのツンドラ植生調査

ナシオガマ・コケモモ・イワウメなどがある。何より印象づけられたのはアブラナ科の豊富さだが、これは日本の高山植生とは異なり、スカンジナビアなどヨーロッパに近い特徴である。

ヤクーツクのアラス（タイガの虫食い）と塩生植生

ヤクーツク周辺については、本誌第9号に木暮さんたちの記録があり、これは今回の調査でもよい参考になった。カラマツ属やヨーロッパアカマツから成るタイガの海にぼつぼつと虫食いのように草地ができており、アラスという。人間による伐採がひとつの引金になっているようだが、これに伴った植生変化の研究はおもしろいテーマになりそうだ。また、少ない降雨量、内陸の低標高地ということもあり、ヤクーツク周辺のアラスや河畔には塩生植物がみられ

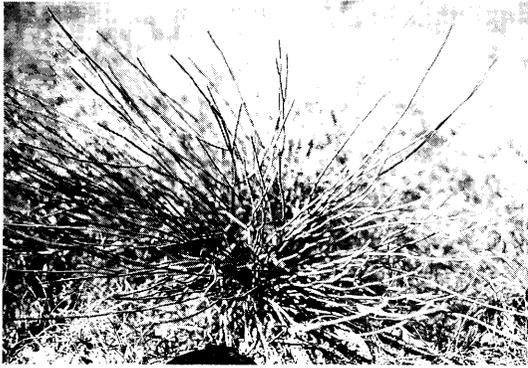
る。海岸の塩沼植生に慣れたわれわれの感覚からするとずいぶん変わった感じがする。また川岸段丘の上など、早春の冠水をうけにくい所には乾性の小規模砂漠が発達しており、裸子植物のマオウ属 (*Ephedra*) や多肉植物のイワレンゲ属 (*Orostachys*) がみられる。しかしこれらの例を除けば、われわれになじみのある植物もかなりある。エゾオオヤマハコベ・フタマタイチゲ・クロバナロウゲ・シャジクソウ・クロマメノキなどなど。

レナ川ぞいの調査（ヤクーツクからジガンスクへ）

ヤクーツク生物学研究所所有の船で2週間ほどレナ川沿いを北上し植物調査をおこなった。優雅な船旅を想像していた者には結構ハードな旅となった。この調査期間中の食事は川で捕った魚であった。レナ川は



レナピラスから見るレナ川



Ephedra monosperma (ヤクーツク近郊)

川ではなく海である、というのが私たちの偽らざる実感だ。途中で天候が悪くなり、中州になっている島で2日ほど足止めをくった。波が荒れて航行不能なのである。かくして、川沿いのいくつかのポイントに船を止め、その周辺で植物採集をし標本を乾燥しながら進むという調査になった。ここでの収穫はハイマツとケショウヤナギが見れたことだった。

レナ川ぞいの調査（ヤクーツクの南西レナピラス）

ヤクーツクの南西、レナ川ぞいにレナピラスとよばれている岩峰岩壁群が数キロにわたって連なる場所がある。名所のひとつにもなっているようで、将来国立公園に指



植物標本の乾燥法

定されるともいう。景観はアメリカのグランドキャニオンにも匹敵すると地元の研究者がいていたが、確かにうなずける。さまざまな形の岩がでてくるとついシャッターを押してしまい、フィルムがいくらあっても足りない。われわれはその岩峰群の端にある岩山に登った。ここから眺めるレナ川はまた雄大でしばし堪能したが、谷ぞいに入るとこれはまたすごいヌカガの来襲である。

ヤブカにはじまってヌカガに終わった東シベリア調査であったが、北海道と東シベリアの植物相の近さを実感した。日本の植物相はこれまで中国・ヒマラヤとの関係ばかりが強調されすぎたきらいがある。これからはカムチャッカや沿海州、そしてシベリアの植物との比較が課題となってきた。